

論文の和文要旨

論文題目：「19世紀フランスにおける民謡収集と地域意識の形成
—地域と国家との間で」

氏名：清水 祐美子

本稿は、19世紀のフランスにおける、民謡収集と地域意識の形成との関係についての考察を目的としている。フランスでは、国民意識の形成と民謡等の民衆の口承の収集・保存との関係が希薄だと先行研究では語られてきた。だがこうした見解は、フランスの例外性を指摘するのみに終始している。本稿では、民謡収集の具体的な局面を分析することを通じ、こうした見解とは異なる像を示す試みを行なった。そのために主たるフィールドとしたのは、政府主導の全国民謡収集事業のフォルトゥール調査である。この民謡調査を取り上げる理由は、次の2点にある。第一に、公教育大臣、公教育省歴史研究委員会、地方の協力者達（地方学術団体で活躍する研究者達や大学区長・初等視学官・小学校教師など）といった、政府と地方のそれぞれの観点から分析を行って一つの事案について立体的に考察することを可能とする、希少な事例だからである。第二に、政府の文化遺産保存政策としての民謡収集に協力するという行為が、地方の研究者らにとっては、地元地域と国家との関係を考える契機となったのではないかとの仮説を立てたためである。近年の研究動向

では地方に住む研究者に注目が集まっており、「地方エリート」が地方学術団体で行なっていた諸々の活動を分析することを通じて彼らの地域意識の形成過程を明らかにし、19世紀フランスにおける地域と国家との関係を捉え直す試みがなされている。本稿でもこうした問題関心を共有し、フォルトゥール調査における地方在住の研究者達の活動について分析を行なった。

本稿の第1章および第2章では、フォルトゥール調査の性格を把握することを主たる目的とした。先行研究で論じられてきたフォルトゥール調査像を再検討し、新たな見解を呈示するべく、公教育大臣と公教育省歴史研究委員会とに着目して論述した。第1章は「民謡」の定義をめぐって歴史研究委員会で交わされた議論を整理し、第2章は公教育省歴史研究委員会の全国組織の構造を検討している。第3章および第4章では、地方の研究者や学校関係者ら、フォルトゥール調査に協力して地元地域の民謡を収集した者達に着目して、彼らが民謡に関して残した記述（フォルトゥール調査での民謡報告や刊行された民謡集）を分析した。第3章で地方言語圏（フランス・フランドル地方）を扱い、第4章でフランス語圏の諸地域の民謡収集を取り上げて、両者を比較する形で、地域意識のあり方に関する言説のそれぞれの特徴を論じた。

本稿で明らかになった事柄は、以下の4点に整理できる。第一に、フォルトゥール調査における「民謡」への関心のあり方である。先行研究ではフォルトゥール調査をフランス民族音楽学の始点と位置付け、旋律の収集を奨励した初の大規模な民謡収集という点を、フォルトゥール調査の特徴として特に強調して論じてきた。だが歴史研究委員会の議事録等を読解したところ、フォルトゥール大臣の立てた民謡収集の構想や歴史研究委員会の例会での議論の中では、音楽的な関心よりも、歴史学的・文献学的関心の方が大きな位置を占めていたことが明らかになった。歴史研究委員会は、民謡を民衆の歴史が刻み込まれている「史料」だとする考え方に則り、全国民謡調査の指揮をとった。実際、フォルトゥール調査はそもそも公教育省で七月王政期以来継続されてきた、未刊行史料集成事業の一環として実施されたのだった。

本稿が明らかにした二点目は、文化遺産保存政策における政府と地方との関係である。1980年代から1990年代に発表された諸々の先行研究は、中央集権的な政府と地方学術団体との関係を対立的な構図で論述していた。そのような中で、フォルトゥール調査で全国に張り巡らされた民謡調査網についても、従来の研究では、中央集権的な政府に既に備わっている機構を利用して全国調査が実施されたと捉えられるにとどまり、調査網は実際には

どの程度、どのようにして機能したのか、あるいは、各地の調査員はどのようにして民謡の調査報告を記したのかといった点について、具体的には検討されてこなかった。本稿では、こうした点を明らかにすることがフォルトゥール調査の性格を理解する上で重要と判断し、フォルトゥール調査の民謡調査網、すなわち歴史研究委員会の正委員から成るパリと、地方学術団体に所属する研究者達から選抜された歴史研究委員会地方委員・通信委員との関係を分析した。その結果、1830年代から1850年代頃の文化政策においては、政府は必ずしも地方に対して強権を発動できなかつたということが分かった。歴史研究委員会の地方のメンバー達は、委員会の実施する諸事業の中から、各人の裁量で各自が研究協力をする事業を選択する自由を持つなど、自立性を確保していた。つまりフォルトゥール調査は、歴史研究委員会の地方委員・通信委員の立場から見れば、民謡収集に興味がある人だけが協力すればよい事業—逆に言えば、興味がなければ協力しなくてもよい事業—だった。フォルトゥール大臣は民謡収集を、歴史研究委員会の諸事業の中の最重点項目に位置付けていたが、彼の熱意と地方のメンバー達のこうした認識との間には温度差があった。フォルトゥール大臣は、地方委員・通信委員では網羅しきれない調査網の穴を埋めるべく、初等視学官や小学校教師ら学校関係者の働きに期待し、殆ど強制的に動員した。中央集権的な政府が組織的に民謡収集を実行したという、これまでの研究で語られてきたフォルトゥール調査像は、学校関係者に関しては言い得ている。だが歴史研究委員会の地方委員・通信委員に関しては、地方の研究者達が自発的に選択し、協力した結果なのだった。フォルトゥール調査は、必ずしも政府の強制の産物だった訳ではない。

では、地方の研究者達にとって、フォルトゥール調査に協力することにはいかなる意味があったか。この問いかけには、本稿で明らかにした事柄のうちの三点目が関わりを持っている。民謡収集と地方在住の研究者のアイデンティティの形成との連関を、フランス・フランドル地方の地方委員・通信委員の二名（ベッケル、クスマケル）を取り上げて論じた。ベッケルもクスマケルも共に、政府によるフランス語浸透策への抵抗意識を持っていた。クスマケルもベッケルも、言語的・文化的多様性を尊重して、緩やかに統合するようなフランスの姿を理想に掲げる国家観を共有していた。ベッケルは、フランス国内で唯一のフランドル語圏としての自負をフォルトゥール大臣や歴史研究委員会に対して強調したのに対し、クスマケルの方は、フランドル語圏唯一のフランス領であるからこそ、フランス・フランドル地方の民謡の旋律には固有な特徴があるという点を強調しながら、民謡収集の成果をまとめた。ベッケルとクスマケルの両者は地元のフランス・フランドル地方の

民謡をフランスの民謡として公教育大臣に報告することを通じて、フランスとの関係だけでなく、国外の同一言語圏と地元地域との関係をも考えながら、フランス・フランドル地方の人間としてのアイデンティティを確立させていったのだった。

第四に、フランス語圏における民謡収集の特徴を論じた。フランス語圏の地域に住む研究者達は、地方言語圏と比較して、自分達の地域には言語的固有性が乏しいと考えていた。彼らにとっては、民謡が民衆の歴史、あるいは地域の歴史（古代・中世等、地域の文化的起源）を体現するという考え方や、民謡の起源探求への関心が比較的希薄だった。代わってフランス語圏の地域の研究者達の関心を集めたのは、民謡の歌われる状況、すなわち、民謡を通して知ることのできる農村民衆の習俗だった。地域とフランスとの間の対立的な関係ではなく、パリから押し寄せる「文明」に農村民衆の「伝統」が対抗するという構図の言説が、フランス語圏の民謡報告の中に看取できた。研究者が地元の民衆のことばの一部を理解できないケースもあり、フランス語圏の地方の研究者自身のアイデンティティが、民謡報告や民謡集に表れているとは言えない。だがフランス語圏の研究者らは農村民衆の習俗の一環として民謡を収集し、民衆のことばに特有の語彙・表現を仔細に観察することを通じて、県単位、ひいてはコミューン単位にまで細分化しながら、農村民衆の言語・習俗面での固有性を看取するに至った。県内の差異に敏感な態度を取り、地理的に見て狭小な地域ごとに固有性を見いだしていったことに、フランス語圏の民謡収集の特徴があった。フランス語圏で記された民謡に関する記述には、コミューンごとに細分化された地域意識のあり方が示されていた。地方在住の研究者らは、地元地域の農村民衆が、ことばや民謡や習俗の違いを根拠に、狭小な地域的なまとまりを単位とするようなアイデンティティを抱いているのではないかと考えて、これを表象していた。

本稿の分析の結果、フランスにおける民謡収集と地域意識の形成との関係は一様に捉えられるものではなく、地方言語圏とフランス語圏の間には相違点があることが分かった。地方言語圏の場合、研究者達が地元地域の民衆が伝承してきた民謡に自らのアイデンティティを仮託しながら、民謡収集を行なっていた。これに対し、フランス語圏の場合は研究者達は地元地域の農村民衆と自らとの間に距離を感じていた可能性があり、民謡収集が研究者自身のアイデンティティの形成と直結していると考え難い事例が見られた。フランス語圏の地方在住の研究者達は、民謡収集を通じて、農村民衆の習俗やことばには地理的に近接する地域間にも微妙な差異があることに注目し、そうした差異を地域的固有性として認識してコミューン単位に細分化された形での地域意識を形成していた。